

早稲田大学現代政治経済研究所

ロシア文学語学学会の国際交流活動とネットワーク

黒岩 幸子

No. J1405

Working Paper Series

Institute for Research in
Contemporary Political and Economic Affairs

Waseda University
169-8050 Tokyo, Japan

ロシア文学語学学会の国際交流活動とネットワーク¹

黒岩幸子（岩手県立大学高等教育推進センター教授）

1. はじめに

江戸末期から明治初頭にかけて日本に導入、摂取されたロシア語・ロシア文学は、日本では蘭学に次ぐ古い研究や教育の伝統を持つにもかかわらず、今日では英仏独語の後塵を拝する地位に甘んじている。また、ロシア関連学会の国際交流活動も他に比べて遅れていると言わざるをえない。その遅滞の原因を明らかにし、遅れを取り戻すための今般のオール・ジャパンおよび各学会の取り組みを紹介し、今後の課題と展望を示すことが本稿の目的である。対象をロシア語学文学学会に絞ると個別的で詳細な論述に陥るので、人文・社会科学系のロシア関連学会を含めて全体の動向を俯瞰できるように努めたい。

2. 日本の人文・社会科学分野のロシア研究組織について

日本のロシア関連学会は、分野ごとに厳密に分かれているのではなく、幅広い研究者を抱えるいくつかの学会があり、各研究者も複数の学会に所属していることが多い。代表的な学会とその概要は以下のとおりだ。（括弧内は設立年と現在のおよその会員数）。

① 日本ロシア文学会²（1950年、480人）

「ロシア語・ロシア文学の研究および普及によって、日本および世界の文化の健全な発展に貢献することを目的とする」³日本ロシア文学会は、近年会員数が減少しているとはいえ、ロシア関連学会のなかでは最大規模だ。学会名は「文学」を冠するが、会員の専門は言語学、文化論、宗教学、人類学、教育学、思想、哲学、音楽、フォークロアなど広範にわたり、毎秋の研究大会には多彩な報告テーマが並ぶ。

② 日本ロシア語教育研究会（ロ教研、ロシア語教育研究会として2000年に発足、80人）

日本ロシア文学会では軽視されがちなロシア語教育に特化した研究会で、「ロシア語教育にかかわる諸問題を理論的かつ実践的に研究し、わが国におけるロシア語教育の発展に寄与することを目的」⁴として2009年に正式な学会組織に移行した。発足時は数名に過ぎなかった会員は、現在も増え続けている。会員の多くは日本ロシア文学会にも所属し、ロシア文学会のロシア語教育委員会の大半がロ教研の会員で構成されて緊密に活動している。

¹ 本稿は2014年7月18日に早稲田大学現代政治経済研究所「日本の対外発信」研究部会（部会主任：砂岡和子）において、同名タイトルで報告した内容に補筆したものである。報告の際には、砂岡和子氏、長興進氏、皆川友香氏（早稲田大学）、小林潔氏、大学院生の曲揚氏に貴重なコメントをいただいた。

² 本稿の執筆に当たっては随所で、日本ロシア文学会編『日本人とロシア語 ロシア語教育の歴史』（ナウカ、2000年）を参考にした。日本ロシア文学会創立50周年記念事業として1992年から準備作業が始まった同書は、多数の会員の分担執筆によって過去200年にわたる日本のロシア語教育の歩みを浮き彫りにしている。

³ 日本ロシア文学会会則第3条（<http://rokyoken.web.fc2.com/>）

⁴ 日本ロシア語教育研究会規約第3条（<http://yaar.jp.org/>学会のご案内/学会会則規定等/）

③ JSSEES (Japanese Society for Slavic and East European Studies、1980年、230人)

「日本におけるスラブ・東欧地域を対象とした研究を広く世界に紹介するために、欧文誌 Japanese Slavic and East European Studies の刊行を目的として」⁵関西の研究者を中心に設立された。国際発信を目標に掲げた初めてのロシア・東欧研究団体である。第1(文学・言語・芸術)、第2(政治・経済・法律・社会)、第3(哲学・思想・歴史・地理)の3分野で論文を募って編集される会誌は毎号が多様な内容だ。

④ ロシア・東欧学会(ソ連・東欧学会として1971年に創設、400人)

会員の重複者が多い③と④は将来の合併を視野に入れて、近年は秋の研究大会を合同開催している。会員に対する年会費の相互優遇措置も始めており、いずれは和文・欧文の2種類の会誌を有する単一学会になると思われる。

⑤ ロシア史研究会(1956年、260人)

①・③・④・⑤は4年毎に4学会合同大会を開催することで合意し、2008年は名古屋で、2012年には京都で共同シンポジウムや合同懇親会を実施した。

⑥ 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター(北海道大学スラブ研究室として1953年に設置、その後はスラブ研究所として官制化され、さらに改組、名称変更を経て現在に至る)。

学会組織ではないが、日本唯一の総合的なスラブ地域研究機関として多くの研究者の交流拠点になっている。専任研究員はわずか10人だが、日本各地に多数の共同研究員がいるほか、常に外国人研究員やプロジェクトごとの研究員を擁して日本のスラブ研究を牽引している。毎年2回、夏と冬に内外から100人を超える研究者が集まる国際シンポジウムを開催し、和文(『スラヴ研究』)と欧文(Acta Slavica Iaponica)の学術誌を出版している。また、国際的に活躍できる若手研究者の育成にも力を入れており、英語のプレゼンテーション・スキルを身につける合宿なども実施している。望月哲男日本ロシア文学会会長(2013年~)は同センターの所属である。

以上、ロシア研究者が所属する学術組織を概観した。日本のロシア研究者の総体を知る手がかりとしては、スラブ・ユーラシア研究所が隔年で発行している『スラブ・ユーラシア研究者名簿』⁶がある。2012年の同名簿の収録者数は1,467人で、日本独文学会の2013年の会員数1,847人⁷よりも少ない。同名簿にはロシアだけでなく東欧諸国や中央アジア、コーカサス、バルト3国など旧ソ連諸国を対象としている研究者も含まれるので、その数の少なさは明白であろう。

いずれは領土問題を解決して平和条約を結び、文化、教育、経済、環境などあらゆる分野で交流や協力を進めていかねばならない隣国ロシアを研究対象とする者が少ないことは、日本に

⁵ JSSEES ホームページ (<http://jssees.world.coocan.jp/OnJSSEES-J.htm>)

⁶ 北海道大学スラブ研究センター『スラブ・ユーラシア研究者名簿 第9版』(2012年)。旧ソ連・東欧関連諸学会の名簿等をもとに1,864人に調査票を発送し、掲載可の返信を得た1,467人のデータを収めている。

⁷ 室井禎之「ドイツ語学文学の国際交流・国際発信 ―日本独文学会の国際交流事業を中心に―」早稲田大学現代政治経済研究所 Working Paper Series, No. J1302, p. 3.

とって憂えるべき問題である。ただし、日本のロシア研究者数が絶対量として少ないわけではなく、逆に、その数はアメリカに次いで多いと言われている。ヨーロッパ諸国では、さらに少ない数の研究者が成果を上げて活発な対外発信を行っている。要は、国際交流を深めて海外に向けて発信できる日本の研究者を増やしてゆくことであろう。

3. 国際交流が遅れた背景

(1) 日本側の事情

アカデミアに限らず全般的に日ロ交流が遅れた原因は日ロ双方にある。日本側の背景としては江戸期からロシア専門家たちを分断している「ロシア融和論」と「ロシア脅威論」の歴史的平行線が挙げられるだろう。その端緒としてよく指摘されるのは、前者が工藤平助の『赤蝦夷風説考』(1783年)、後者が林子平の『三国通覧図説』(1785年)および『海国兵談』(1787~1791年)である。

交易と航海拠点を求めて陸路・海路で日本を探していたロシアが千島列島をつたって南下してくると、日本には二つの対ロ観が生まれる。仙台藩の医師であった工藤平助は、ロシアの希望に応じて交易を行い、ロシアを理解して対応しようとする宥和政策を説いた。赤蝦夷とはロシア人を意味する。同じ仙台藩士でも林子平はロシアを脅威と捉え、蝦夷地の確実な領有と海防の重要性を主張した。

この融和論と脅威論の二項対立は、その後の日ロ/日ソ間に生じた戦争やイデオロギー的差異により意味内容を変化させながら現在まで残っている。近年の顕著な事例としては、2002年の鈴木宗男スキャンダル⁸が挙げられるだろう。日ロ領土問題に柔軟な対応を試みた同氏と彼に近い外務官僚たち融和論者が、これを危険視した脅威論者からパージされたという構図が成り立つのではないだろうか。

専門家たちが対立を引きずっている間に、日本国民にはすっかりロシア嫌いが定着してしまった。内閣府が毎年行っている「外交に関する世論調査」⁹の結果を総覧すると、初めてソ連に関する質問が設けられた1978年から2013年までの35年間、日本人の一貫したソ連/ロシア嫌いが一目瞭然だ。ソ連/ロシアに対して「親しみを感じない」人の割合は毎年70~85%に達し、「親しみを感じる」人は20%未満に過ぎない。アメリカに対しては「親しみを感じる人」が約8割、「親しみを感じない人」が約2割で、ロシアとは対照的な結果だ。近年関係が悪化している中国と韓国に対する親近感はやによってかなりの振幅があるが、ソ連/ロシアに対するような恒常的に否定的な結果は見られない。

嫌露病、恐露病とも呼ばれる日本人の対ロ意識がいかに形成され、なぜ今なお克服されないのかは、ロシア専門家が共有すべき今後の研究課題である。主にロシア語・ロシア文学の受容

⁸ 国後島に日本が建設した宿泊施設をめぐる疑惑が2002年2月に表面化したことを発端に検察が捜査を始め、鈴木宗男および彼の秘書のほか外務省、商社、建設会社などから十数人の逮捕者が出て、その多くが起訴され有罪判決を受けた。

⁹ 外交に関する国民意識を把握して施策の参考とするために総理府(2001年から内閣府)が1975年からほぼ毎年実施している調査。(http://www8.cao.go.jp/survey/index-gai.html)

を踏まえつつ日本側の事情をみていく。

① ロシア語・ロシア文学の受容と影響

日本のロシア語教育の始まりは、漂流民の大黒屋光太夫が10年におよぶ苦難の末にロシアから帰還した1792年とされる。彼を根室に送り届けたのは、エカテリーナ女帝の命を受けて日本に通商の要望書を渡そうと試みたロシア使節団であり、この年は日ロ交渉史元年でもある。蘭学者の桂川甫周は、光太夫からの聞き取りをもとに日本初のロシア事情の概説書『北槎聞略』（1794年）を編纂し、光太夫自身も周囲にロシア語の知識を伝授した。

1855年に日魯通好条約が締結されて国交が樹立すると、1858年に箱館（現在の函館）にロシア領事館が開設され、領事館付きの司祭も来日した。1861年に着任した2代目のニコライ・カサトキンは、次第に日本人への布教活動に取り組み、信者のためにロシア語の指導も行った。1873年に拠点を東京に移したニコライが神学校を立ち上げると、ロシア語学習者も増えていく。短期間の帰国を除いては日露戦争中も日本に留まったニコライは、日本におけるロシア正教の普及とロシア語教育に大きな足跡を残して1912年に東京で亡くなった。

ロシア文学が日本で初めて紹介されたのは、高須治助の翻案による『露国奇聞 花心蝶思録』が出版された1883年だ。原作はプーシキンの『大尉の娘』（1836年）だが、一人称の語りが三人称になり、ロシア人の名前がイギリス風になり、プガチョフの乱に関する史実の部分は削除されて漢文調で書かれている。『大尉の娘』の翻訳ではなく、当時の日本の小説のスタイルに置き換えた翻案と呼ぶべきものである。

その後ロシア文学は次々と日本語に翻訳されるようになり、日本は世界でも有数のロシア文学愛好国になった。近年ではドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』（1880年）の亀山郁夫による新訳版（光文社古典新訳文庫、2006-2007年）が、古典文学としては珍しく空前のベストセラーとなって話題を集めた。

翻訳にも翻案にも当たらないが、ロシア文学の影響が明白な日本の作品も多い。例えば、芥川龍之介は『芋粥』（1916年）の主人公「某と云う五位」は、ゴーゴリの『外套』（1842年）の主人公、9等官アカーキイ・アカーキエウイチに重なる。似たようなエピソードや描写がいくつもあり、文章を丸ごと翻訳している箇所もある。ゴーゴリが描いた帝政ロシアの下級官僚が、平安時代の下級武士となって芥川の作品に現れているのだ。

日本はロシア語・ロシア文学と比較的早い時期に出会い、その受容も順調であったかのようだが、実際には日ロ国家関係が暗い影を落としていた。

② 敵性国家の言語としてのロシア語

18世紀に千島列島上で邂逅した日本とロシアが、様々な障害を克服しながら1855年に国交を樹立するまでの短く華やかな交流史のページが終わると、次は不信と対立に満ちた日ロ関係の長く陰惨なページが始まる。日本のロシア語教育が日ロ交渉と同時に始まったことが象徴するように、ロシア語は敵性言語として国家主導のもとに学習環境が整えられていった。帝国主義の日本がいずれ朝鮮・満洲をめぐる中国・ロシアと衝突することは明らかで、支那語とロシア語の習得は戦争準備として不可欠と考えられた。経済、技術、学術のための英仏独語とは異なり、ロシア語はもっぱら軍事・外交手段として重視された。

1875年に締結された樺太千島交換条約（ペテルブルグ条約）¹⁰は後に日ロ両国民の不評を買い、文学者も不満を述べている。チェーホフは『サハリン島』（1895年）のなかで「…千島列島のうちでも日本に最も接近したところを5、6島遣るだけでよかったのに、われわれは22島も与えてしまひ…」¹¹と嘆き、二葉亭四迷は「将来日本の深憂大患となるのはロシアに極つて」と考えて外国語学校の露語科に入学したと回想している（「予が半生の懺悔」1908年）¹²。

1873年に設立された東京外国語学校には露語科があったが、12年後に東京商業学校（現在の一橋大学）に吸収合併された。1897年に改めて設立された第二次東京外国語学校（現在の東京外国語大学）にも露語部が開かれた。1916年には早稲田大学が第二外国語として露西亜語科を設置し、1921年創立の大阪外国語学校も露語部を置いた。国策で進められたロシア語教育とはいえ各学校は本格的に取り組み、その後のロシア文学・語学研究を牽引する中核的な役割を担いながら数多くのロシア専門家を養成した。

ロシア語を開設した学校では、東洋学者のニコライ・ネフスキーに代表されるようなロシアの良質の知識人も教鞭をとった¹³。革命や内戦、日ロ国交断絶等の政治的理由で日本に滞在したロシア知識人たちは、軍事や政治とは離れたロシアの知性を日本に伝授した。

対ロ戦争を意識したロシア語教育に特化した機関としては、1919年創設の哈爾賓学院（1933年の改名以前は日露協会学校）、陸軍幼年学校、陸軍露語教育隊、海軍兵学校などが挙げられる。中国東北部のハルピンには革命後に多数の教養ある亡命ロシア人が流入しており、哈爾賓学院の学生たちの多くはロシア人の家庭に下宿してロシア文化を実生活で吸収することができた。

敵性言語としてのロシア語学習がロシアの豊かな教養と文化の吸収を伴うというアンビバレンツは、当時の日本のロシア受容の特徴である。1889年の初版以来、改訂を重ねつつ広く大学教科書として使われ、1936年までに1万部売れたという『露西亜文法』¹⁴を編纂したグレーボフは、ロシア公使館付きの司祭だった。そして同書の訳者は、東京の神学校で学び、ロシア留学を経て陸軍大学教官になった岩沢丙吉だった。

日露戦争から日本のシベリア出兵、ソ満国境地域での衝突とノモンハン事件、第二次世界大戦末期の日ソ戦まで日本とロシア/ソ連は何度も交戦した。戦前、戦中にロシア語を学び、軍部や満鉄などで働いていた人の中には、1956年の日ソ国交回復まで11年間のシベリア抑留生活を強いられた者もいた。戦争の時代は終わったが、日ロはいまだに平和条約を締結していない。

¹⁰ この条約で日ロは1855年に日魯通好条約で確定した国境線を変更し、未確定のまま残されていたサハリン島はロシア領になり、ウルップ島以北の千島列島はロシアから日本に譲渡されて、千島全島が日本領になった。

¹¹ チェーホフ『サハリン島』下巻、中村融訳、岩波文庫、1997年、30頁。

¹² 『二葉亭四迷全集』第5巻、岩波書店、1965年。これは二葉亭がロシア語を学び始めた理由を語った有名なエピソードだが、最近の研究によると、条約締結当時11歳だった二葉亭の回想は不正確で、後知恵で語ったものと考えられる。ヨコタ村上孝之『二葉亭四迷』ミネルヴァ書房、18-20頁。

¹³ 本国からの給費を失ったネフスキーは、1919年から1929年にかけて小樽高等商業学校、大阪外国語学校、京都帝国大学でロシア語を教えた。

¹⁴ グレーボフ『露西亜文法』岩澤丙吉譯、東京印刷（丸善）、1898年。

③ 戦後のロシア語・ロシア文学教育研究の飛躍と限界

日本の国家体制がリセットされた戦後は、ロシア研究者は国家の桎梏から解放されて自由になった。しかし、冷戦構造が定着するなかでソ連は日本の仮想敵国となり、ソ連に対する融和論と脅威論はさらにイデオロギーの対立を孕みながら平行線をたどった。

ロシア史研究会とソ連・東欧学会には、1990年頃まで重複した会員がいなかったと言われる。ソ連を研究対象として正当に評価しようとする前者に対し、後者にはソ連を危険視して否定する傾向が強かった。文学者たちの多くは政治的立場と研究を切り離していたため、日本ロシア文学会はイデオロギーとは一線を画した中立的なスタンスをとった。それは自ずと、ソ連本国とは一定の距離を置くことにつながった。

1980年代末まで日本にはソ連への国費留学制度がなく、ビザが必要なソ連へ出かける煩雑さもあり研究者の足は遠のいた。留学が難しいソ連を諦めて、あえて国費留学制度のある東欧諸国に向かう若手研究者も現れた。

例外的な制度としては、1960年代にモスクワの民族友好大学（通称ルンバ大学）が日本人留学生を受け入れていた。5年間の教育を無償で提供して奨学金も給付する国立大学で、主に社会主義圏の開発途上国の学生を対象としていたが、日本人は例外的に受け入れが認められていた。ところが、日本国内の学生運動が盛んだった当時、毛沢東主義に傾倒した留学生の一部がソ連を批判して中国共産党に招かれて北京経由で帰国したことがあった。これが中ソ論争の最中であったソ連当局を激怒させて、日本人学生の受け入れが中止されたと言われている。

戦後もソ連と疎遠であったことは、結果として、日本に生きたロシア語を使えない研究者を増やすことになった。ロシア語の文献を読み、翻訳をし、日本語で論文を発表して日本国内で認められても、海外の研究者と議論を戦わせることも研究成果を海外発信することもできない研究者も多かった。学会そのものが内向きの性格を帯びていたと言えるだろう。

このような状況は1990年代以降に劇的に変わった。私費を含めロシア留学は容易になり、ロシアの研究機関や研究者たちとの接触も格段に密度が高まった。近年の研究者は、ロシアはもちろん、諸外国の学会などで自由に討議し、交流できるロシア語および英語の能力が必要とされている。また、ロシアおよび海外の研究成果を摂取するだけでなく、日本の研究成果を外に発信してゆくことが求められている。

2014年に創設された「日本ロシア文学会大賞」¹⁵第1回受賞者である井桁貞義氏（早稲田大学名誉教授）の授賞に当たり、選考委員会は彼の功績を5つにまとめた。その筆頭に挙げられたのは、一貫したドストエフスキー研究の成果と、そのロシア語の論文がロシアの専門誌に再掲されるなど、海外でも高く評価されたことだった。

今後とも井桁氏に続いて国際的に活躍できる若手研究者が数多く現れることが望まれている。

(2) ロシア側の事情

¹⁵ 若手研究者を対象とする従来の「日本ロシア文学会賞」に加えて、それよりも上の世代を対象にロシア語・文学・文化研究などの功績に対して新たに設置された。2014年秋に日本ロシア文学会ホームページ上に顕彰コーナーが設けられる予定。

イデオロギーの束縛が厳しく、特に西側諸国との自由な交流に制約が多かったせいでソ連の学術研究機関の国際交流活動が遅れたことは、改めて言うまでもないだろう。ソ連邦解体と新生ロシア誕生の時期には社会が混乱して経済状況も著しく悪化した。研究・言論の自由を獲得できたことはロシアのアカデミアにとっての大きな成果だった。ここでは、現在のロシアの学術組織とそこに所属する研究者たちにみられる問題を取り上げることにする。

① ロシアの学術組織の特殊性

ロシアの主な研究機関はロシア科学アカデミーという大規模な全国組織に所属しており、大学とは別に活動している。西側諸国に組織されている学会にあたるような団体がないので、日本のロシア関連学会はカウンター・パートナーが持てないということだ。

ロシアの優れた研究者のほとんどは、科学アカデミーの各種研究所に所属している。大学は教育に重点を置き、総じて大学よりも科学アカデミー研究所の学者の方が「格上」と認識されている。モスクワ大学やペテルブルグ大学など国立名門大学もあるが、世界の大学ランキングの上位に入ることがないのは研究分野が弱いせいだと思われる。科学アカデミーの研究者たちが大学で教えることもあるが、原則として各研究所は大学とは別に若手研究者を指導して科学アカデミーの学位を与える。

日本ロシア文学会と交流があるのは、ペテルブルグのロシア文学研究所（プーシキン館）と世界文学研究所（モスクワ）である。どちらも科学アカデミーの研究所だが、この二つの組織は互いに疎遠で連携することはない。日本ロシア文学会が会員として所属している MAPRYAL（マプリヤル、国際ロシア語ロシア文学教員協会）は、ペテルブルグ元学長が代表を務める国際学会の体裁をとっているが、ロシア語教育関係者の緩やかな団体に過ぎない。したがって、日本の研究者たちは、それぞれの専門に見合った個人的なネットワークに頼ることになる。

② 国際学術交流に生じる問題

ロシアの学術組織との交流を試みると、以下の事例に見られるような問題が生じやすい。

日本ロシア文学会はソ連科学アカデミー世界文学研究所からの呼びかけに応じて 1980 年から 1989 年にかけて「日ソ文学シンポジウム」を開催した。第 1 回目はチェーホフをテーマに早稲田大学で開催され、その後は日本とモスクワで交互に第 6 回まで続いた。日ソのロシア文学者が定期的集まって報告、討議する画期的な企画だったが、回を重ねるに連れて日本側の不満が募ったという。ソ連側に同じような報告内容で毎回出席する参加者が出て、シンポジウムの学術的価値に疑問の声が上がるようになったからだ。日本側は経費の捻出に苦勞しながら会員たちが多くの時間を割いてボランティアでシンポジウムの運営に当たるのに対し、ソ連側は公的な事業として行い、訪日は一部の関係者の特権のようになっていた。結局、経済状況の厳しさ等を理由にソ連側から中止の要請があって同シンポジウムは 1989 年に終了した。

ソ連の研究者にとって西側諸国に出ることは、ビザ取得においても経済的にも難しかった。日本に確実な受け入れ先を得ることはある種の特権であり、組織よりも個人の手中に収まることになった。これはアカデミアに限らず、ソ連との交流でよく起こる現象だった。

関西の研究者を中心に 1984 年に組織され、本年秋に 30 周年を迎える日ロ極東学術交流会にも同様の傾向が見られる。ロシア科学アカデミー極東支部と国立極東大学があるウラジオスト

ク市はロシア極東随一の学術拠点だが、太平洋艦隊の主要基地であり軍事機密にかかわるため、ソ連時代は立ち入り制限のある閉鎖都市だった。日本の研究者グループは、交流が可能だったハバロフスクの経済研究所を手がかりに接触を始め、1984年に大阪大学で第1回日ロ極東学術シンポジウムの開催に成功した。ビザ取得などが難しいためウラジオストクの研究者たちはナホトカから日本周遊の観光船に乗り、神戸に上陸した1日をシンポジウムに当てた。その後もシンポジウムは、関西とハバロフスク・ウラジオストクで交互に毎年続いている。

長年閉ざされていたロシア極東の学術拠点の重い扉を開けた画期的な交流であったが、回数を重ねるうちにロシア側参加者の顔ぶれが決まっていた学術的刺激に欠けるとの不満が日本側から上がるようになった。ロシア側に若手研究者の参加を促しても、来日メンバーの多くは発足時からの高齢の学者たちだ。

ただし、近年はロシアのアカデミアの状況もかなり変化し、上述のような事態は少なくなっている。留学や在外研究が容易にできるようになり、欧米アカデミアのスタンダードを身に付けた研究者も増えた。かれらは独自に研究費を獲得して、積極的に海外の学会などに参加している。また、国際的な活動に力を入れる学術組織も増えている。

先述のMAPRYAL（マプリヤル）は大統領令で設置された「ロシアの世界」基金から潤沢な資金援助を受けるようになり、活発に国際交流活動を進めている。4年毎の国際大会は2011年に上海で開催され、2015年はグラナダ（スペイン）で予定されている。ロシア語およびロシア文化の普及を目的とする「ロシアの世界」基金の2013年総会がマプリヤルのセミナーと合わせてペテルブルグで開かれ、世界各地から筆者を含めて大勢のロシア語教育関係者が招かれた¹⁶。参加者のために1週間の日程が生まれ、総会、セミナーのほかに豪華なエクスカージョンやパーティーなどを含むすべての旅費、滞在費はロシア側が負担した。しかし、日本ロシア文学会を代表して参加した筆者に対して、今後の研究教育交流にかかわる提案や話し合いは一切なかった。費用対効果を考慮せずにお祭りのようなイベントに膨大な資金を費やすロシア側の鷹揚とも杜撰ともとれるスタンスは、かつてのソ連研究者たちが日本との交流を私物化しがちだったこと同様に西側の研究組織を戸惑わせるものだ。

③ アカデミアのインナー・サークル

ロシアのアカデミアとの交流においては人的なネットワークが重要だが、個人的な信頼関係を築くことはさほど容易ではない。ロシアの優れた学者たちの生き方として「国内亡命」と呼ばれるスタイルがある。できる限り権力から身を遠ざけ、自分の研究の理解者だけの閉じたネットワークをつくり、そのインナー・サークルだけで自由な学術論争や意見交換を行うというものだ。ソルジェニーツィンやサハロフのように命と社会的地位を危険にさらしながら権力に抵抗するほどの意志はないが、権力に寄り添って意に染まぬ公定イデオロギーの宣伝屋にもなりたくない。そのような人たちの多くは、国内亡命者のようにひっそりと小さなネットワークのなかで自分自身の精神世界を守りながら生きている。

¹⁶ 拙稿『『ロシアの世界』基金第7回総会参加報告 ―ロシアのソフト・パワーの行方―』『ロシア語教育研究』第5号、2014年。

このようなソ連時代の知識人のライフ・スタイルは、社会主義を放棄したロシアになっても消滅したわけではない。言論や報道に対するプーチンの強圧的な姿勢を嫌うロシアの学者は多く、権力から距離を置こうとする意識も根強い。そして、社会の表からは見えにくいインナー・サークルに外国人が入り込み、受け入れられることは今も難しい。グローバル・スタンダードを身につけたロシアの研究者が今後とも増えていくことは明らかだが、かれらとのネットワーク構築においてもロシア国内の特殊な事情を理解する必要があるだろう。

4. 遅れを取り戻すための活動

国際交流が遅れた理由が日ロ双方にあることを縷々述べたが、その遅れを取り戻す試みは1980年代後半から始まっている。日本からの国際的な発信をいっそう充実させる必要性は、立場を超えて日本の諸学会に共有されるようになった。ここではオール・ジャパンの取り組みと日本ロシア文学会の個別の取り組みを紹介する。

(1) オール・ジャパンの取り組み

① 1980年代後半の取り組み

ゴルバチョフが登場してソ連の改革が始まると、日本からも学术交流の拡大を求める声があった。1986年1月に日本ロシア文学会およびロシア・ソ連関係の5つの研究団体は、連盟で日本外務大臣宛に要望書を提出して日ソ文化協定の締結、国費留学生制度のソ連への適用、研究者派遣枠の拡大などを求めた。当時の研究者の交流は、個別の大学間協定のほかには日本学術振興会のわずかな枠に頼るほかなかった。日ソ関係の改善もあり同年5月には文化交流協定が締結され、12月に日ソ両政府は国費交換留学生制度に関する文書を取り交わした。

1990年代に入ると両国政府の後押しもあり、日ロ双方向で留学生が増えた。1998年の日ロ首脳会談（小渕・エリツィン）で人的交流の拡充が合意され、翌年には東京に日ロ青年交流センターが設置された。すでに約4,000人の青年交流の実績があり、そこには若手研究者に対するフェローシップも含まれる¹⁷。

② ICCEES 幕張大会

オール・ジャパンの象徴的な取り組みとしては、現在準備が進んでいる The 9th ICCEES (International Council for Central and East European Studies) World Congress 2015 in Makuhari, Japan が挙げられる。ICCEES は世界中のスラブ研究組織が所属する国際学会で、5年毎に開催される国際会議には世界各地から様々な分野のスラブ研究者が一堂に会する。2005年のベルリン、2010年のストックホルム大会に続き、2015年は幕張（千葉）での開催が決まっている。アジアで開かれる初めての大会であり、すでに約1,700人が参加登録している。8月3~8日の1週間をかけて大会公用語の露英独仏語で数百のパネルやラウンドテーブルが実施される。

ICCEES 大会の日本招致を可能にしたのは、1998年に発足した JCREES (The Japan Council for Russian and East European Studies、日本ロシア・東欧研究連絡協議会)である。

¹⁷ 日ロ青年交流センターホームページ (http://www.jrex.or.jp/ja/about_seturitu.html)

「日本における旧ソ連・東欧地域の研究を促進し、この地域の研究に関して海外との交流を円滑にすることを目的とする」¹⁸JCREESは、日本ロシア文学会、ロシア・東欧学会など6つの関係団体で構成され、日本ロシア文学会の前会長である沼野充義氏（東京大学）が代表幹事を務めている。6団体は経費負担に合意し、2013年に合同で組織委員会を立ち上げた。スラブ研究の分野では日本で初めての大規模な国際学会であり、各学会が旅費、参加費を補助するなどして若手研究者の参加を支援している。幕張大会は従来の大会に比べてロシアからのエントリーが多いことが特徴で、日本からのエントリー数に迫る約350人が登録している。

③ 日ロ相互イメージの検証

まだ個別的な試みだが、日ロ交流の立ち後れの原因をすべて政治や国家関係に帰するだけでなく、一般市民の視線を含めて総合的に検証しようとする日ロ合同研究も始まっている。2012年に始まった「日ロ歴史家会議」¹⁹は、両国の研究者が過去200年の日ロ関係について討議を重ねつつ「パラレル・ヒストリー」を執筆するという企画だ。歴史家だけでなく文学、文化論、国際政治などの専門家も加わった学際研究であり、すでにモスクワと日本で交互に4回の会議を終えて出版の準備が進んでいる。

パラレル・ヒストリーには日ロ相互イメージに関する章も設けられる予定だ。日本人とロシア人の双方に見られるステレオタイプな対ロ観・対日観や日本人のロシア嫌いがどのように形成されたのかは、今後日ロの研究者が合同で検証すべきテーマである。そのような研究は個別に始まっているが²⁰、ここで重要なことは単に調査・分析・研究で終わらせるだけでなく、日ロの溝を克服する具体的な活動に研究者自身も取り組もうとする姿勢である。

(2) 日本ロシア文学会の取り組み

実行委員会が運営してきた日ソ文学シンポジウムは、1985年からは理事会の下に新設された国際交流委員会が担当することになった。同委員会はシンポジウム終了後も活動を続け、現在も学会の国際交流の活性化に努めている。1992年から「国際交流ニューズレター」を発行して国際学会の開催など海外の情報を伝え、1996年にはそれに替わるホームページを開設してさらに情報量を増やした。これが1998年に学会のホームページに移行して現在も使われている。

個人的な人脈による海外研究者の招聘や国際シンポジウムの実施などはソ連時代から行われてきたが、このような個別の交流を組織的な交流へ拡大していくことが現在の目標と言えるだろう。沼野充義前会長（2010～2013年度）は「学会を開かれたものに」を就任時の目標の1つに掲げ、望月哲男現会長も「研究の成果を広く関連学界と社会に紹介し、国際的な研究ネット

¹⁸ 日本ロシア・東欧研究連絡協議会規約第2項

(<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/jcrees/article.html>)

¹⁹ 日本側は五百旗頭真氏（熊本県立大学理事長）、ロシア側はアナトリー・トルクノフ氏（モスクワ国際関係大学長）を座長とする約30人の日ロ研究者が、歴史対話を重ねたうえで項目別にパラレル・ヒストリーを執筆する。日ロ両国で2015年に和・露・英の3カ国語で出版予定。

²⁰ 例えば、ユリア・ミハイロバ（研究代表）「視覚メディアにあらわれた日露相互のイメージと表象 -日露関係の理解のために-」科学研究費補助金助成研究（基盤研究（B）、2003～2006年度）。

ワークに向けて開いていくのも学会のつとめ」²¹として、積極的に国際交流を推進している。

2014年秋の研究大会²²では、ロシア科学アカデミーロシア文学研究所（プーシキン館）の若手研究者を交えたワークショップ「Новая фаза в толстоведении（トルストイ研究の新たな位相）」が予定されている。一方的な情報発信だけでなく、企画の段階から海外の研究者と合同でパネルやシンポジウムを運営していくケースも増えている。

ICCEES 幕張大会などで他学会と協働していることは先述したとおりだ。近年、日本の大学では少子化の煽りで教員ポストが減少しているうえに、文学・言語学など人文系の教科が削減される傾向が強く、若手研究者の就職難は深刻な問題である。そこで専任職にない研究者に対しては国際学会参加のための旅費支援を行っているほか、国内での国際的な企画に対しても国際交流委員会が補助を出している。どちらも数万円単位に過ぎないが、国際交流活動の奨励の意味も含めて活用されている。

5. 日本ロシア語教育研究会（ロ教研）のネットワークづくり

日本ロシア文学会の会員の大半が大学でロシア語を教えているにもかかわらず、同学会にロシア語教育の専門家は少なく、異言語教育研究の国際的水準や日本国内の他の言語に比べてロシア語教育は長年立ち後れてきた。管見によると日本の大学院でロシア語教育をテーマに博士号を取得した研究者はまだいない。このような状況を憂えて林田理恵氏（大阪大学、日本ロシア文学会関西支部長、初代ロ教研代表）を中心に立ち上がったのが日本ロシア語教育研究会である。その研究成果は2010年創刊の『ロシア語教育研究』などに発表されているので、ここではロ教研が取り組んでいるネットワークづくりについて紹介する。

① 国内ネットワーク

ロシアとの地域的な結びつきが深い北海道や北陸を含めて日本各地に点在するロシア語教員の多くは、専門的な知識も情報もなく独自の経験を頼りに教壇に立っている。ロ教研は大学だけでなく中等教育機関や一般市民、子どもを対象とするロシア語教師を広く取り込んだネットワークをつくり、ロシア語教育の質の向上と教員間の連携を目指している。

2014年8月末のロ教研会員数はまだ76人だが、ロシア語教育を専門とする大学院生、高等学校・高等専門学校教員、バイリンガル児童のロシア語指導者など立場は様々で、約3割にあたる22人がロシア語の母語話者だ。

② 海外ネットワーク

ロ教研は発足時から海外の研究者を招いた講演会、ワークショップ、シンポジウムなどを開催しており、同研究会にとって国際交流は特別のイベントではなく通常の活動の一部になっている。ロシアはじめ海外にルーツをもつ会員が多いので、その人脈によるネットワークは自ずと外にも開かれている。資金力が不足しているため、国際的な事業は科研費、有志による寄付、海外研修・出張の利用、ボランティアなどで運営されている。

ロシア語話者の会員たちが中心となって2012年に始まった「継承語セミナー」は、グロー

²¹ (<http://yaar.jpn.org/>学会のご案内/会長よりご挨拶/)

²² 日本ロシア文学会2014年度研究大会は、11月1・2日に山形大学で開催予定。

バル化とともに世界的に増加しているバイリンガル児童の言語教育をテーマとするもので、国際的にも注目されている新分野だ。第1回目には中島和子氏（トロント大学名誉教授）、翌年にはエカテリーナ・プロタソヴァ氏（ヘルシンキ大学）が招待講演を行い²³、日本在住のロシア人の間に大きな反響があった。

③ 多言語ネットワーク

ロ教研は内外ネットワークとともに、ロシア語以外の言語教育に携わる人たちとのネットワーク構築にも力を入れている。伝統と蓄積のある英語や日本語をはじめ多言語の教育法の知見を得てロシア語教育への応用を検討するために、専門家を研究会に招いて意見交換を重ねてきた。2014年サマーセミナーには、「隣語」をテーマに中・韓・露の3言語の専門家が集まる予定だ²⁴。

大規模な科研費プロジェクトとして2012年に実施された全国6言語アンケート調査²⁵にロ教研会員で構成される科研グループ²⁶も加わったことで、さらに多言語とのネットワークが広がっている。本稿を執筆する契機もそのネットワークから生まれたものだ。言語横断的な調査研究により、大学教育におけるロシア語の位置づけや学生たちの学習意識を相対的に検証する視座を得られた意義は大きい。

④ ロシア語教育支援・就職情報サイト

会誌を創刊する以前からロ教研は、メール、ホームページ、会報などで知識や情報の共有をはかってき、新たに「ロシア語教育支援・就職情報サイト」²⁷の開設を決めて、現在コンテンツを準備している。教育支援サイトは、カリキュラム開発方法や具体的な指導方法を示す教案を掲載するほか、ロシア語教育の教材や情報を共有する場としての活用が期待されている。

就職情報サイトは主にロシア語を学ぶ学生を対象に、ロシア進出企業リストやロシア語を実際に仕事で使っている若い社会人の声などの掲載を予定している。全国6言語アンケート調査結果で明らかになったことの一つは、ロシア語学習者の多くが学習とキャリア・アップを切り離して考えていることだ。英語や中国語の学習者が自分の将来にとって修得が役立つと考えているのとは対照的な結果だった。しかし、実際には日本のロシア進出企業はロシア語を使える社員の不足に悩んでいる。同サイトは、このようなアンバランスを補う一歩として考案された。

²³ 両氏の講演録は、それぞれ『ロシア語教育研究』第4号（2013年）・第5号（2014年）に掲載された。2014年10月に東京で第3回セミナーが予定されている。

²⁴ 2014年9月20・21日（新潟県立大学）日本ロシア語教育研究会サマーセミナー・新潟県立大学国際地域学部外国語教育セミナー共同開催「隣語を通じて「つながる」言語教育—中国語、韓国語、ロシア語の取り組み—」

²⁵ 西山教行（研究代表）「新しい言語教育観に基づいた複数の外国語教育で使用できる共通言語教育枠の総合研究」（基盤研究（A）2011~2014年度）全国の大学の異言語学習者1万人以上を対象に行った意識調査をもとに分析、研究を進めている。

²⁶ 林田理恵（研究代表）「大学間、高等学校—大学間ロシア語教育ネットワークの確立」（基盤研究（B）2011~2014年度）全国6言語アンケート調査に加わり、ロシア語学習者のアンケート結果を個別に分析している。現在までの成果は「2012年度研究実績報告書」および『ロシア語教育研究』第5号の特集論文に発表された。

²⁷ 脚注25の科研プロジェクトの一環として2014年末の開設を予定している。

ロシア語教育と学生の就職をリンクさせることは大学教員にとっては難しく、また賛否も分かれるところだが、近年のロシア語学習者の減少傾向を考慮するならば、学習の動機づけの問題に真剣に取り組むべきであろう。全般的な日ロ交流の遅れを改善するためにも言語修得は有効であり、何よりも、大学のロシア語履修生を安定的に維持、増加させることは、ロシア語の専任ポストを確保することにつながる。学習者だけでなく、教育者もまた「実益」を考える時代である。

以上が日本ロシア語教育研究会の4つのネットワーク構築の試みである。他のロシア関連学会が時代を経て次第に内から外へとシフトしているのに対して、発足当初から開かれたネットワークづくりを目指している点が同会の特徴と言えるだろう。

6. むすび

筆者に与えられたテーマはロシア文学語学学会の活動であったが、他のロシア関連学会も含めて過去にさかのぼって述べた。日本におけるロシアにかかわる教育研究は、国家体制や国家関係に規定されてきた過去の事実を抜きに語るができないと考えたからだ。外圧の苦い体験から戦後は内向きのベクトルが強く働いてきた観のあるロシア関連学会だが、冷戦後の世界的なパラダイム転換を経てグローバル化する世界のなかでは、再度外向きのベクトルが必要となり、それがまた時代の要請ではないだろうか。

長い歴史と様々な活動事例のなかから何を取り出すかは筆者個人の判断によるもので、総論と個別的な事例が混在し、私見が入ることを恐れずに記述した。文責は筆者個人に帰するものである。いずれにしても、国際交流の重要性と外に開かれたネットワーク構築の意義は、すでに多くの研究者に共有されていると確信している。

以下、講演後のフロアとの質疑応答を整理して掲載する。演者の黒岩幸子先生と司会の長與進先生以外は、記号による匿名表示とした。

長與：大変熱のこもった熱いお話、ありがとうございました。フロアからの質問がありましたらどうぞお願いします。

K：Kと申します。2年間ロシアにいて日本語を教えておりましたが、今年の夏に戻ってまいりました。ロシアに渡る前は日本の大学でロシア語教育に従事していました。以前から、日本のロシア文学会と複数あるロシア関係諸団体との仲が気になっていました。例えば、日本ロシア文学会と、東京ロシア語学院にはかなり距離があると感じます。ロシアからロシア語教育の専門家が講演に来るのに、日本ロシア語文学会には来ないという、ゆがんだ関係をどのように捉えておられますか。

黒岩：東京ロシア語学院は、日本ユーラシア協会系ですね。共産党系です。これと社会党系が分かれています。昔の名残で、日ユ協会（日本ユーラシア協会）と日ロ協会（日本ロシア協会）の2つの派があるんです。両方とも高齢化し、若い人が来ない。一緒に活動したらどうで

すかと言っても、無理なんですね。東京ロシア語学院にももっとがんばってほしいと思うんですけど、日ユ協会と日ロ協会の高齢化した体質が、ネックになっています。こないだ日ユ協会に呼ばれて、北方領土の話をしに行ったことあるんですが、平均年齢 70 歳くらいでした。高齢の日本人ばかりで領土問題を論じて、ラチがあかないでしょう。もっと若い人を引き入れること考えないと、組織がどんどんポシャってしまいます。日ユ協会なんかは会員数が減っていると聞きます。超党派でやってくれる若手の政治家などに期待するしかないかなと思ってます。

M: 私は今、早稲田大学の高等研究所で助教として勤務しています。専門は社会学、特に人口学です。私は上智大学のロシア語科を卒業したあと、アメリカに向かい、ハーバード大学の地域研究プログラムでマスターを取りました。そのころまではずっとロシア語をやっていたんですが、現在ではロシアの人口問題など、社会学を専門領域にしています。今日は久しぶりにロシア語のお話を伺って、大変興味深くお聞きしました。私自身の情報発信は、アメリカでずっと大学院にいたため、国際的な学会誌に英語でも書いています。今日お話に出たロシア関係の学会の存在は知ってはいますが、まだどこにも入会していません。ロシア等に関する論文は書き続けていて、発表もしていますが、私が日本の学会に入っていないため、投稿する機会を逸しています。アメリカから帰国したばかりですが、今日のお話を聞いて徐々に入ってみようと思いました。

黒岩: すばらしい方に来ていただきました。今ここで助教をしていらっしゃるんですね。人口学ならば、一橋大学の雲和広さんが専門ですね。彼は JSSEES などいろいろな学会に入っています。

M: 雲先生の著作の一章を私が訳したことがあり、存じ上げています。

黒岩: ぜひこういう方に日本の学会に入ってもらいたいです。今日はロシア関係の学会のコミercialしていきます。日本の学会も、ハーバード大学など海外で力をつけた若い研究者たちにどんどん出入りしてもらわないと駄目です。北海道大学のスラブ・ユーラシア研究センターなど、あちこち当たってみてください。

M: 存在は知ってるんですけど、なかなか入っていく勇気がなくて。

黒岩: 歓迎されますよ。あとで宣伝しますので、ぜひ。

M: はい。

Q: 早稲田大学の政治学研究科の博士後期課程 2 年に所属している Q といいます。中国から来た留学生です。昔の中国は確かにロシアと仲が良く、政治的観念も緊密でしたが、私たちの若い年代では親近感があまりないと感じます。ロシア文学は小さいときから読んだことがあり、有名な文学作品は結構たくさん中国語に翻訳されています。でも、先ほど先生がおっしゃったように、文化的にちょっと乱暴的なイメージがあり、親近感あまり湧きません。

黒岩: そう、分かります。

Q: 日本では確かに、中国よりロシアに関するものが少ないので、ロシア語を勉強する日本人学生も少ないのではないのでしょうか。今、韓流ドラマで韓国語を勉強する人が増えていますね。

黒岩: ロシア語は韓国語とっしょに日本の大学の六種の外国語に入っていますが、実際にはポルトガル語やイタリア語に抜かれていて、学習者数は少ないのではないかという研究者がい

ます。韓国語と比べ実態はどうか分かりません。韓流ドラマは主婦たちに人気で、韓国語を勉強している人がいっぱいいますよね。そういう人たちも数に入れたら、たぶんロシア語は負けていると思います。Qさんも、日本人のロシア嫌いを中国に持ち帰らないでくださいね。

Q: 嫌いということではなく、ロシアというとウオッカなど、文化的になんとか男性的で、ちょっと乱暴なイメージがすぐ浮かんでくるためです。あと寒い印象が強いです。

黒岩: まったく日本人と同じようなイメージお持ちじゃないですか。日本語があまりに上手だからでしょうか。でも寒くないということを書いてあげてください。先ほど話しましたが、1960年代にソ連に民族友好大学、通称ルムンバ大学というのがありました。今もあるんですが、その大学が、10年間日本の学生を受け入れていました。いわゆるアメリカのフルブライト奨学金のようなもので、全部お金を出してくれるのです。最初は一般公募でしたが、1964年頃から社会党系、総評系の学生が入学しました。若いからご存じないと思うけれど、1960年代に中ソ論争があり、中国とソ連は猛烈に対立して軍事衝突まで起こしました。その頃、モスクワに留学していた日本人学生は、みんな非常に政治的ですから、一部の学生は毛沢東思想に染まって、中国人学生と一緒にデモなどやって、最後は中国共産党に呼ばれて北京経由で帰国し、日本で反ソ本を出版したせいで、ソ連側をカンカンに怒らせたことがあります。それ以降、ルムンバ大学は日本人学生を取らなくなったそうです。ソ連と中国はとても興味深い関係ですから、ぜひロシアにも関心を持ってください。

長興: ルムンバ大学は1960年代に作られた、わりと新しい大学ですね。

黒岩: そうですね。新しいですね。

長興: 確か最初は日本の政党がらみですね。共産党とか社会党に推薦された人が行って、65年でしたか、デモしたりなんかして。もうその頃から日本人は取らないことになったと聞きました。あの頃はいわゆる左翼系の学生たちの間ではルムンバ大学に行くというのは、1つのプレステージみたいなものがあったし、ルムンバ大学から帰ってきた人とお付き合いしたことがありますが、ちょっと雰囲気は違いますね。

黒岩: 最初は一般公募で留学生が行きましたが、そのあとは社会党系とか政治的な関係の人たちばかりが行くようになったそうです。

長興: 今でもあるんですか。

黒岩: あります。「ルムンバ」という名称は外して「ロシア民族友好大学」という名前で。でも昔のような特別な民族友好のための大学ではなくなっただけです。留学生も沢山いるそうで、普通の私学の大学になっているようです。

Q: 今流行っているインターネットを使ったロシア語教育とか、気軽に勉強できるといいと思います。

黒岩: そうですね。ロシアで作っているロシア語の教育サイトみたいなものはいくつかあります。東京外国語大もHPに「言語モジュール」というコーナーがあり、パパパッとクリックすると独学でけっこう勉強できるサイトを公開しています。こういうサイトが増えるといいですね。

S: 日本の学会は国際交流や横の広がりもあるとは思いますが、学会同士が専門別に縦割りに

なってしまう、今日はロシア語学会のお話をお聞きして、本当に勉強になりました。私が中国語を学習したのは年齢的には遅いのですが、Qさんより30年も前の時代なので、その頃の中国の友人と、Qさんのロシアに対する感覚に、隔世の感があるのに驚きました。当時、私の同僚の中国人の先生は、第一外国語がロシア語で、中ソの関係が決裂してから、強制的に英語や日本語の教師に配置替えになった方が圧倒的に多かったのです。そういう時代から見ると、中国がいかに大きな転換を経たかが分かりますね。また中国とソ連、ロシアは体制的に共産主義や社会主義を目指したので、学会や研究者の性格も非常に似たところがあります。鄧小平が大胆な市場開放政策を行う前は、中国は閉鎖的で官僚的で、一部の知識エリートは共産党を信じることができず、国内外に亡命する態度を取っていた点もよく似ていると思います。日本でも昔は共産党系の人々が細々と中国と交流をしていたのが、90年代以降、一気に自民党など執行権側の人々が、急速に中国と接近した結果、かつての同盟派は孤立し、少数派になってしまいました。この動きは、現在の日露関係との違いかと思えます。

黒岩：そうですね。

S：近年、中国は急速に国力を付け、日本の中国語学習者も膨張しました。しかし、中国という国の体制の本質は変わっていないと思います。日本の中国好きや中国学習者は、そのところを理解していないことが多く、歴史問題も含め、たびたび紛糾が起こるのはこのためだと思います。そういう意味では言語習得や文学研究は、その民族なりアイデンティティを理解する最も近道なので、たゆみなくソ連や、ロシアの人たちの研究をなさって発信されていることに尊敬いたします。黒岩先生はちょっと自虐的に述べられましたが、嫌口感情などの影響で、確かに日本の大学におけるロシア語学習や、ロシア文学、地域研究者は、人数的には減っているのかもしれませんが、確実にずっとロシアの知性を継承し続けるのはすごいことです。日本も中国もそういうロシア文化を継承しているわけだし、これからは古いものだけではなくて、新しいロシアの文化を発掘し、若い世代に伝えることも大事だと思いました。日露関係の緩和や、ロシア国内の国際化に、外国の研究者が働きかけるとするのは限界があります。今の日中・中韓の政治的外交的な硬直状態に、学会としては直接手を出せないのと同様です。ロシア自身の努力にかかるんでしょうけれども、日本側からも文化的手段を通じて働きかけるのはありえると思います。

M先生のような若い方が学会に入会するのは、黒岩先生自身はもちろんオープンでウェルカムですが、年配の方には、ロシア語やロシア文化を背景にしつつ、国際発信をする若い学者を受け入れ、さらに育てようとする素地が学会にあるのでしょうか。

黒岩：ロシア文学会は今でこそ一生懸命国際発信していますが、そういう素地はやや薄いんじゃないかなと思いますね。むしろそういうことを意識しているのはスラブ・ユーラシア研究センターやJSSEESの方で、若手を育てようとしています。すごく力はあるけれど、日本では学会に入っていないという人もいます。ロシア関係の学会は、どこかでこうした有能な人材を取りこぼしていると思います。本来、しっかりそういう若手の学者を見つけて、取りこぼさずに包摂すべきと思うのですが、その役割がロシア文学会にはまだ出来ていないのではないかと思います。

長與：スラブ・ユーラシア研究センターですね。

黒岩：スラ研と言わずに、うちにもぜひ入ってくださいね。私たちも意識的に若い人たちを取り込んでいかないと。今までの学会の中にはやはり、若い人を育てようという気持ちが弱かったのではないのでしょうか。今は就職も厳しいし、なんとか優秀な人が辞めていかないように、学会として取り組まないといけないと思います。

S：英語がこれほどグローバルランゲージとして幅をきかせる時代なので、ロシア語のみならず、ほかの言語も優秀な若手を育て、就職をしていただかないと、先行きが危ぶまれます。

黒岩：そうですね。

S：その言語を使用する領域を増やさないと、先が見えない状況ですね。中国の場合には、この20年間に学習人口がものすごく増え、学会の会員数も伸びたこともあって、世界的な学会のネットワークが飛躍的に広がりました。中国人自身が本当にビックリするほど国際化したので、どこに行っても中国人とほかの外国人と一緒にやれる学会があります。日本もこの潮流に乗って連携が強まっています。学会の国際連携の面で、日本のロシア語学会はどのような考えをお持ちでしょうか。

黒岩：私たちも今、アジアのスラブ研究者がもう少し連携した方がいいんじゃないかと考えています。2015年のICCEES幕張大会は、5年に一度の大きな国際大会です。アジアだけでも1年毎に持ち回りで開催するようになり、最初日本、韓国、中国、それからインドもやりました。アジアのロシア研究者同氏がもっと交流していこうという意識があります。

今年はロシア語教育研究会のサマーセミナーを新潟で開催します。

S：私が入っている社会言語学会では、ネフスキーさんの孫弟子に当たる学者がたくさんいらして、社会科学系の学会とも連携をし、ロシア語を使ったり、ロシア問題、ロシアの言語や文化問題を、社会的に研究する学者をたくさん育成できるといいですね。若い方が、自分もこういう研究ができるんだとか、こういう就職口があるんだって思えるような学会であれば、学部でも学習する人が増えてくるでしょう。

長與：それではこれで閉会としたいと思います。黒岩さん、ご参加のみなさん、どうもありがとうございました。